

平成21年度における大型クラゲの出現状況(総括)

- 東シナ海・黄海で6月下旬以降、大型クラゲは広範囲にわたり高密度で出現し、その状況が10月まで持続。
 - 対馬周辺での出現は、2004年以降では最も早かった(7月1日)。また、津軽海峡通過後の東北沿岸での南下も非常に速かった。
 - 日本海沿岸及び太平洋東北沿岸の多くの海域で大量出現(大量出現年であった2005・2006年に匹敵、海域によってはそれを上回る水準：とりわけ若狭湾及び太平洋側の青森・岩手では長期間大量出現が継続)。
 - 北海道西岸でも大量出現が認められ、オホーツク海にも出現。
 - 房総半島以西の関東～近畿沿岸でも出現し、一部の海域では大量出現(相模湾～伊豆半島周辺)。
 - 2010年1月以降急速に出現量が低下、2月にはまとまった出現なし(過去の大量出現年に比べると早い終息)。
- ※ここでいう「大量出現」とは、定置網1網あたり概ね千尾以上の入網状況を示す

海域別の出現の特徴

(1) 東シナ海・黄海

- 6月下旬以降、広範囲にわたり高密度で出現(7月の黄海における平均密度は2006・2007年とほぼ同レベル)。
- 中国が6月に東シナ海北部～黄海南部において実施した分布調査結果によると、大型クラゲの高密度分布域の範囲及びその最大密度からみて、調査海域での分布量は2003年以降で最も多かった可能性がある。
- 2006・2007年には8月以降分布密度は急速に低下したが、2009年では10月の時点でも高密度分布域が認められ、11月になって分布密度は低下した。

(2) 対馬海峡

- 7月1日に対馬西岸で初確認(これまで最も早かった2005年の7月8日より1週間早かった)。
- 7月下旬に分布密度が最大となった後、8月になると密度は低下し9月以降低水準となった。9月下旬～10月下旬に密度はやや増加したものの11月上旬以降は再び低水準となった。

○東シナ海・黄海から日本海への大型クラゲの流入の大部分は、対馬海峡西水道経由であった（一般的な流入パターン）。

（３）日本海

- 韓国東岸を北上する対馬暖流第三分枝（図 1 参照）が強かったため、対馬海峡西水道から流入した大型クラゲは、一旦韓国東岸を北上した後、沖合域を中心に東方に輸送される傾向が強かった。
- 韓国東岸でも 7 月中旬以降ほぼ全域で出現した。
- 日本海沿岸での出現時期（図 2 参照）は、若狭湾以西では 2005 年に比べて 1 週間程度早かったが、佐渡～男鹿半島付近ではほぼ同じであった。
- ネット採集による沖合域分布調査の結果、隠岐～能登の広範囲にわたり高密度で分布するとともに、男鹿半島周辺でも第三分枝によって沖合域を移動してきたと考えられるものが高密度で認められ、図 2 に示した経路で輸送されていることが明らかとなった。
- 8 月下旬に若狭湾周辺を中心に出現量が急増し、9 月以降には若狭湾周辺に加え、隠岐、佐渡及び艫作崎～男鹿半島を中心に大量出現が認められた。
- 10 月中旬には北海道の積丹半島でも大量出現となり、10 月下旬には宗谷海峡を越えてオホーツク海に達した。

（４）太平洋（東北沿岸）

- 津軽暖流は東方への張り出しが全般に弱く、津軽海峡からそのまま南下して岸沿いを流れたため、9 月上旬に津軽海峡で確認された大型クラゲは短期間のうちに南に輸送され、9 月中旬には宮城、10 月上旬には茨城まで達した。
- 9 月中旬以降青森・岩手では大量出現となり、10 月中旬には宮城、10 月下旬には茨城・千葉でも大量出現が確認された。

（５）太平洋（関東～近畿沿岸）

- 10 月に関東近海で黒潮が離岸していたため、千葉まで輸送された大型クラゲは黒潮内側域にまで拡がり、神奈川・静岡で大量出現となった。
- 分布の先端はさらに西に拡大し、11 月 30 日には和歌山県潮岬付近で確認された（関東～近畿沿岸で大型クラゲが出現したのは 2005 年以来初めて）。

※本報告は、水産庁事業「有害生物漁業被害防止総合対策事業」の一環として実施された「大型クラゲ国際共同調査」（実施機関：水産総合研究センター、水産大学校、広島大学、山形大学、名古屋大学、東京大学）及び「有害生物出現調査及び情報提供」（実施機関：水産総合研究センター、漁業情報サービスセンター）の成果に基づいて作成されたものである。

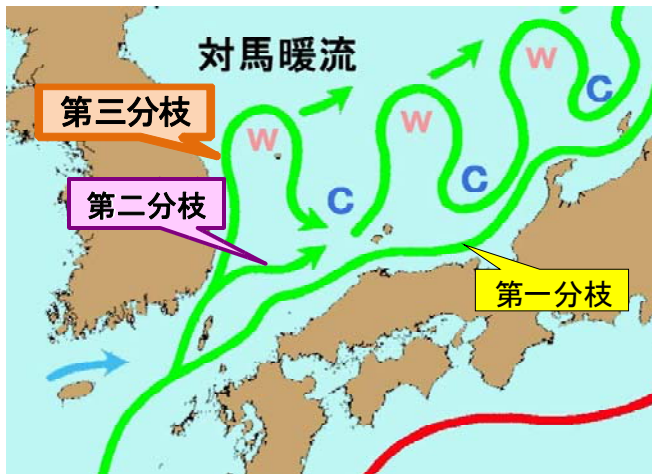


図1 日本海西部における海流模式図.

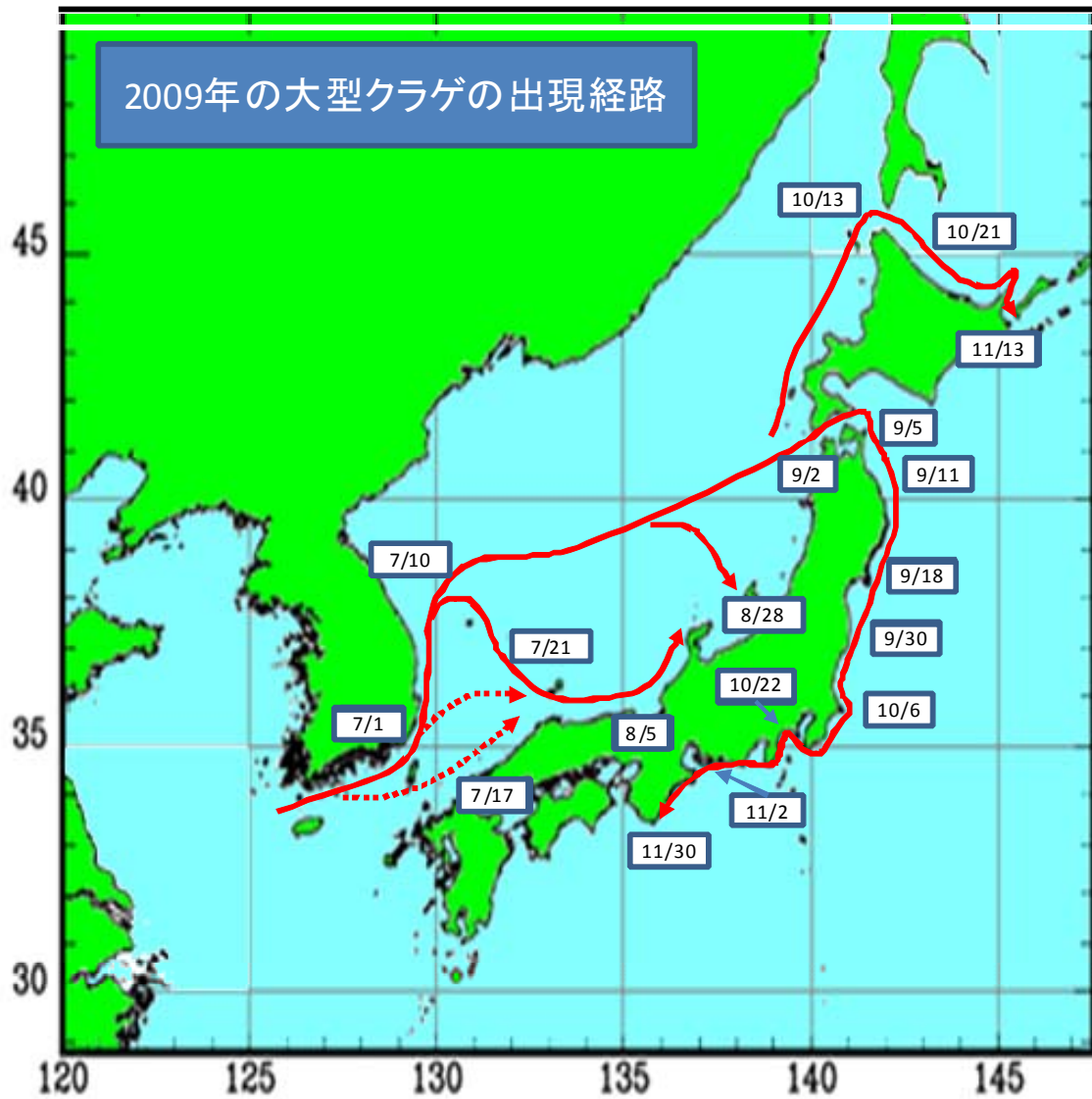


図2 2009年の大型クラゲの出現経路及び時期.